

文化芸能

大波小波

村上春樹、村上龍に言及した吉本隆明の批評集『ふたりの村上』が昨年上梓された。両者を通して、時代の文学や思想の最先端を読み取ろうとした吉本のモチ

ふたりの村上のいま

もの(新潮社)が出た。主人公に母がキーワードは無意識、幻想、そして母親である。自分にとって「失われているもの」とは何かを問う話。非現実かは重要ではない。

無意識をイメージ化する。一方の村上春樹、今月『猫を棄てる 父親について語るとき』(文芸春秋)が上梓。今まで語るもの

2020.4.18

日本最大級の読書会運営 人と共有 広がる理解

山本 多津也さん (「猫町倶楽部」主宰)



「猫町倶楽部」は、日本最大級といわれる読書会グループだ。名古屋を拠点に、東京や大阪など全国各地で年約二百回開かれ、のべ約九千人が参加する。主宰の山本多津也さん(左)が、発足から約十五年の歩みを著書『読書入門』(幻冬舎新書)にまとめ

途中から文学の分科会を作り、取り上げる本の軸が文芸に移っていく。「面白さを最大限深く味わうには、結論が決まっているビジネス書より、文学のような読みの幅を築くジャンルの方が向いている」。直感に当たった。他人と共有すると、一人で読むより理解や思考が広がる。「自分の感想が、自分の体の外にも生まれていくことに気付く」

近年、多様な人が集まる居場所としての機能も注目されている。読書家であることで変わり者扱いされた経験がある参加者は少なくない。けれど自分の意見を当たり前と言える場をもつことで、人や社会との関わり方が違ってくる。会の参加者同士での結婚や転職も多いという。コロナ禍でその機能が生かせない時期が続くが、ソウハウには多様な業界から注目が集まっている。

土曜 訪問



福田若之の句がある 『俳句』四月号には、中原道夫の「疫病禍」と題された特別作品二十一句をはじめとして、すでに新型コロナウイルスにまつわる句や記述がいくらか見てとれる。そんな風景のなかにあって、「精緻10句競詠」の欄に掲載された野名紅里「とつくにすつと啼つてある」の「あんなとこころにからつてつつも雪」という一句に、抜群の感じを受けた。

どうにかもちこたえる

「俳句には救われていると思う。自分の面倒をみれないと話にならないので、安心できる言葉を書いていきたい」と記す平成十年生まれのこの書き手の句は、おそろくひとに読まれることよりも前から



今年の桜は季節外れの雪にもどうにかもちこたえたが...

近づける言葉

タ や 部 間 人 は ろ 贈 賞 敵 じ 人 部 間 人 は ろ



笠木さんの林忠彦賞に「社会が求め代を一番象徴する贈る第二十九回」

母が選ばれた受賞記念写真展